

保育者養成校における障害理解教育の必要性への気づきを促す教育実践（Ⅰ） — 可視的変形についての意識調査の実施・分析を通して —

Practices to prompt Students' Awareness about the Necessity of Education for Understanding Special Needs in the Nursery Teacher Training Junior College

杉田 律子*

(令和4年7月25日受理)

要約

「特別支援教育A」および「特別支援教育B」では、障害のある子どもに対する教育だけではなく、障害はないが特別な教育的ニーズのある子どもの生活上の困難さや支援の方法の理解を授業目標としている。しかし、特別支援＝障害児支援というイメージを持っているという学生が多い。また、障害の特性の理解や個別支援については関心を持っているが、子どもの人間関係形成を基盤に置いたクラス運営、なにより自身の障害観を意識する機会が少ないように思われる。そのため「特別支援教育A」および「特別支援教育B」の授業内において障害理解教育について触れ、「心のバリアフリー」について考える機会を設けている。

今回、第三部2年生対象「特別支援教育A」の13回目の授業において障害以外の特別支援を考えるきっかけとして、可視的変形についてのWeb記事を題材として、グループを用いた意見交換の機会を設け、また第14回目の授業で子どもたちの人間関係形成を基盤に置いた障害理解教育の在り方を考える実践を行った。

意識調査の意見交換の実践を通して、学生は他者の意見を興味深く受け止め、教育の必要性を気づく契機となり一定の効果はあったが、不十分である。今後、系統だった授業計画を立てなおす必要がある。

キーワード：可視的変形、障害理解教育、人間関係

keywords：Visible Difference, education to understand disability, human relationship

1. はじめに

平成29年11月17日、教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会において取りまとめられた「教職課程コアカリキュラム」が公表された。「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」については、この領域を3つの項目に分けて、それぞれの一般目標を（1）特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の理解、（2）特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の教育課程及び支援の方法、（3）障害はないが特別な教育的ニーズのある幼児、児童及び生徒の把握や支援¹、と設定されている。

本学保育科においても、「特別支援教育A」およ

び「特別支援教育B」の演習科目を設置し、年間を通して特別支援教育についての基礎知識を学び、特別支援教育の実践力を身につけることを目指している。

「特別支援教育A」の授業では、①障害の概念と障害児保育の歴史的変遷、障害児保育を支える理念を理解し、インクルーシブな保育・教育について理解する ②障害についての知識を理解し、保育における発達の援助の概要を理解する ③様々な教育ニーズについて関心を持ち、支援について考えることを到達目標として、グループ討議などアクティブラーニングを取り入れながら、学んだ知識をもとに意見交換を行う機会を多く持つ

(*すぎたりつこ 保育科准教授 発達心理学・特別支援教育学)

表1 特別支援教育Aの授業項目

	授業項目
1	障害の概念／ノーマライゼーション／合理的配慮
2	障害児保育の歴史の変遷／ICF
3	インクルーシブ保育・教育
4	障害児の理解と援助①肢体不自由・視覚障害・聴覚障害
5	障害児の理解と援助②知的障害
6	障害児保育の実際①アセスメント
7	障害児の理解と援助③発達障害の概要
8	障害児の理解と援助④発達障害児の支援方法
9	障害児保育の実際②発達障害児の支援（事例検討）
10	障害児保育の実際③自立活動と専門機関との連携
11	障害児保育の実際④発達障害児の支援（事例検討）
12	障害児保育の実際④家庭支援／施設内の協働体制
13	特別の教育的ニーズのある子どもの把握と支援
14	障害児保育の実際⑤障害理解教育
15	学修のまとめ

た。表1は、2022年度Ⅰ期の授業計画のうち、15回の授業項目を示したものである。

特別支援教育を支える理念であるノーマライゼーションとはどのような歴史的背景から生まれた思想であるのか、について力点を置き、教師・保育者が子どもたちの学ぶ権利を守る意義、教育における平等とは何か、ということについて考える機会を設けることから始めた。

2022年Ⅱ期科目である「特別支援教育B」の授業では、①特別支援を必要とする幼児、障害の特性および心身の発達を理解する ②特別支援を必要とする幼児の課題を理解し、支援の方法を理解する ③障害はないが特別の教育的ニーズのある幼児の困難さとその対応を理解することを到達目標にして、グループ研究を軸にして、具体的な教材研究や事例研究をもとにより実践的な学習を行う予定である。

このように、「特別支援教育A」および「特別支援教育B」では少しでも関心を持ちやすいように事例検討などのアクティブラーニングを心がけてはいるが、残念ながら、学生の特別支援教育に関

する意識は高いとはいえない。保育実習や教育実習などの保育現場において経験している学年の学生であっても、「もし自分に障害があったらどんなことに困ると思いますか」「保育現場で障害のある子どもがクラスにいとどんな配慮が必要ですか」という問いを発したとしても、「自分はその立場ではないのでわからない」という返答を返す学生がいて、なかなか自分の事として想像しようする意欲を持ってない様子がかがえる。障害のある子どもに対する配慮については「具体的な方法はわからないけど、必要である」という意識はあるものの、それ以外の特別な教育ニーズのある子どもへの興味関心が高いとは言えない。

そこで今回は、筆者が担当する保育科第三部2年生Ⅰ期科目の「特別支援教育A」において、障害以外の特別の教育的ニーズのある例として、近年「見た目問題」としてメディアで紹介される機会が増えた可視的変形に関するWeb記事を題材とした取り組みを行った。授業内で、保育学生の意識を調査しつつ、その結果を授業内でクラスの学生の意見を共有する実践を通して、今後の授業の在り方についての考察を深めていくことを目的とした。

さらに、その理解を深めるための障害理解教育の取り組みについて考えていきたい。障害理解とは、「障害のある人に関わるすべての事象を内容としている人権思想、特にノーマライゼーションの思想を基軸に据えた考え方であり、障害に関する科学的認識の集大成である」²と定義し、障害理解は「障害者を好意的に評価することが障害理解ではなく、障害に関する科学的認識を持つこと。障害者はかわいそうな存在というステレオタイプの思い込みは科学的認識ではない」と述べている。そして、「障害理解」を構成する要素として、①障害に関する正確な「知識」、②知識を基にした適切な「認識」、③認識から形成される「態度」、④態度の発現としての「行動」の4つからなり、障害理解は実際に行動として発現されてこそ意義があるもの²⁾である。今回は、まずは障害理解の発達段階のまず第1段階の「気づき」を目指していきたい。可視的変形が障害に含まれるイギリス

とは異なり、日本では障害とは認識されていないのが現状ではあるが、可視的変形もまた障害と同様に理解が必要な分野であるとして「障害理解教育」という用語を使用する。

2. 目的

ここで本論において取り上げる可視的変形および「見た目問題」という用語の取り扱いについて述べておきたい。

今回取り上げるのは、何らかの先天的または後天的疾患（奇形、外傷を含む）が原因で生じる目に見える外見上の差異についてである。

疾患や外傷に伴う外見上の差異についての研究は近年増加しつつあるが、欧米においても1980年代まではほとんど研究対象とされてこなかった。そのため、いまだ呼称が定まっておらず、日本においても、「疾患固有の容貌」³、「異形」⁴「ユニークフェイス」⁵「可視的変形」⁶など研究者により様々な呼称を用いている。現在では日本語訳で「可視的変形」と訳される Visible Difference を用いる研究者が増加しているが、授業内では学生になじみやすい「見た目問題」と表現した。そのため、今後は本文中でも学術的には用いられていない「見た目問題」と表記をする。

「見た目問題」とは、「顔や体に生まれつきアザがあったり、事故や病気によるキズ、ヤケド、脱毛など『見た目（外見）』の症状がある人たちが、『見た目』を理由とする差別や偏見のせいでぶつかってしまう問題」⁷をいう。この「この見た目問題」という用語は、特定非営利活動法人マイフェイス・マイスタイル（以下 MFMS）により、2008年から提唱されたものであり、MFMSは2009年ごろから「見た目問題」（「」を含む）と正式表記として統一している。毎日新聞⁸や読売新聞⁹、朝日新聞¹⁰などの紙面上においてもこの表記が用いられているため、本論では、すでにこの症例について知っている学生にとっては馴染みやすい用語である「見た目問題」を用いることとした。「見た目問題」の当事者は、見た目を理由とした偏見や差別、いじめ、当事者自身の見た目へのコンプレックスから起こる対人関係の悩み、引きこもり、

孤立など（前出7）の問題を抱え、また症状によっては身体機能に大きな支障がなく、日常生活には困らない場合や治療の緊急性がないことも多いことから、身体障害者などには該当せず、公的支援の対象とならない事例が多い。（前出7）しかしながら、「見た目問題」はいじめやからかいなどの人間関係上大きな問題を生じる契機となりやすい。教師・保育者はクラスの人間関係について留意をしながら、学級経営を行っていく必要がある。

学生には、もしも「見た目問題」のある子どもを保育することになったら、ということ想像することにより、自身の心に目を傾けこの問題の支援方法を考えて言っていくことを願いたい。

しかしながら、まだ現場でも取り上げられづらい話題であるため、今回教材で取り上げることで初めて知ったという学生も多い。その支援の取り組みもまだ少ないことから、解決が難しい。しかし、「知る」ことから理解は深まるため、まずは、気づくことに重視した教育実践から始めた。

3. 方法

「見た目問題」に関する Web 記事¹¹をスライド投影しながらクラスで読み、質問を投げかけた。質問の回答は随時グーグルフォームを用いて回収し、その結果をスライド投影して、皆で共有しあった。

事前に、質問調査で得た内容は、「兵庫大学短期大学研究集録」等で研究成果としてまとめる研究目的以外では使用しないことを説明したうえで、①回答したくない設問には回答しなくてもよいこと、②誰の意見かは担当教員にもわからないこと、③結果のまとめは本学で使用しているクラウド型の教育支援サービスである manaba 上で全員に報告することを伝えた。

(1) 対象者

調査対象は、本学第三部2年生、筆者の担当する「特別支援教育A」第13回目授業の履修者63名のうち、出席者56名（うち男子1名）である。第13回目授業は、保育実習Ⅰに伴う施設実習を終え

た直後であり、表1で示した通り、インクルーシブ教育について、様々な障害の特性や基本的な支援などについてはすでに講義を終えている状態である。

(2) 提示資料

学生に提示した資料は、顔の変形や、あざ、傷の痕などによる「人と違った外見」を持ったため、学校や恋愛、就職で苦労し「生きづらさ」を抱える9人のルポルタージュ¹²の著者に対するインタビュー記事である。Web記事上に掲載されている写真を学生に見せながら、その疾患の説明や記事の内容を簡単に紹介した。学生に対して示したのは、アルビノ、円形脱毛症、トリーチャーコリンズ症候群、動静脈奇形の当事者の写真とあざの特殊メイクをした著者の5枚の写真である。

また、「見た目問題」について討議を進める前に、「障害以外の特別支援の対象となるものは」という問いの後、教育支援システム manaba 上にUPした、多様性をテーマにした連載記事¹³を紹介した。記事で取り上げられているテーマは、「障害」「LGBTQ」「夜間中学」「宗教」の4つである。

(3) 質問項目

①障害以外で特別支援が必要となるケースはどんなものがありますか。②あなたは見た目を気にしますか、等の本人の事前の意識を問う質問と、Web記事を見て「見た目問題」のある方々の映像を見た後に、①映像を見てどう思うか、②「見た目問題」のある子どもが自分の勤める施設に入所してきた際、配慮はどうするか、「見た目問題」に関する意見交換後の③他者の意見を聞いてどう思うか、などの質問をした。

(4) 方法および手続き

1) 意見の集約について

通常の授業内の課題は、紙プリントもしくは、教育支援システム manaba を用いてデータで回収しているが、この方法で意見集約すると、授業担当者である筆者には誰の意見かが分かってしまうので、「正しくない意見」「好ましくない意見

を恐れる学生は書きづらいと感じることが予想される。また、学生は自分の意見が他者に知られるのを恐れる心情に配慮するため、学生の意見の集約は無記名で実施できるグーグルフォームを用いた。しかし、質問提示は4回に分けて実施したので、設問ごとのクロス集計ができるように、授業開始時に2桁の番号を学生にランダムに配布し、質問のたびに、番号を入力してもらい、のちに回答を集計できるようにした。

2) 13回目授業の学習の流れ

13回目授業当日の学習の流れは表2の通りである。

表2 第13回目（90分）の授業展開

時間	活動内容
0 -	授業の概要とデータ収集の方法についての説明
5 -	障害以外の特別支援の対象を問う質問
15 -	学生から意見の紹介。LGBT などに関する新聞記事を紹介
35 -	自信が見た目を気にしているかどうかの質問と学生の意見の共有
45 -	「見た目問題」について Web 記事に掲載されている症状などについて説明
65 -	映像を見た率直な感想の質問と学生の意見の共有
75 -	「見た目問題」のある子どもへの支援に関する感想の質問と学生の意見の共有
85 -	他者の意見を聞いての感想の共有

授業当初に①特別支援は障害だけが対象ではなく、様々な問題がある②今回は「見た目問題」を取り上げる③受講者の意見をもとに話し合いを進めるが、誰の意見かがわからないようにグーグルフォームを用いて学生の感想・意見を収集すること等を説明した。

授業開始時に「特別支援教育は、障害児だけが対象ではなく、その他の特別な教育的ニーズが必要な子どもも対象となっている」ことを伝えたいので、どんなものでもよいので、思いつくものを書き上げてもらった。

そのうえで、学生から意見の出た「外国籍の子ども」「貧困」「児童虐待」などについて簡単に説

明した後に、manabaに掲載した新聞記事を紹介した。その後、学生から出なかった意見の例として「見た目問題」の話題提供を行った。

まず初めに、自身が見た目を気にするかどうかの質問を行い、「見た目」についての意識をクラスで共有したことで、今回のテーマを自分の事としてとらえることを期待した。

学生の「見た目」への関心の高さを共有した後、今回「見た目問題」について取り上げる意図を説明した。「見た目」を気にしている人が多いのにも関わらず、「見た目問題」はまだまだ教育の分野では取り上げる機会が少ない、個人的なこととしてとらえてしまいがちであり当事者が声をあげづらいため、教師・保育者を目指す学生にぜひ知ってもらいたいことであると説明した後で、「見た目問題」について取り上げた連載記事¹¹⁾を紹介する。記事は、日本財団ジャーナル(2019,9,24)の記事である。Web記事のURLはmanabaに貼り付けておいて、プロジェクターで投影する以外にも、学生自身のスマートフォンでも閲覧できるようにしておいた。

その後、「見た目問題」のある方を取材したWeb記事を紹介して、「見た目問題」のある方の映像を見た率直な感想や「見た目問題」のある子どもが自分の勤める施設に入所してきた際、配慮はどうか、などの質問をした。

質問をするたびに、学生の回答をプロジェクターで投影して、回答者の意見は学生たちと共有した。最も多い回答や珍しい意見などを紹介したが、授業者である筆者自身の意見はなるべく出さないように気を付けた。学生が自分以外の多様な考え方や、物事の多面性に気づくことをねらいとしながら、意見の紹介を心がけた。

4. 結果

当日の出席者56名のうち、回答者は55名であった。「見た目問題」は青年期の学生にとっても非常にデリケートな問題であり、どのような回答をしたのか他者に知られるのを恐れる学生がいる。また、「好ましい回答」を期待されているとの圧力を感じさせては学生の率直な意見が反映されない

おそれがあるため、あえて回答中の学生の様子をうかがったり、授業者が机間巡視したりするような行動はしなかった。そのため、出席者のうち1名が回答をしていなかったが、答えたくない質問だったのか、授業に参加していなかったかどうかは判断できない。

(1) 「見た目問題」学習前の意見

1) 障害以外の特別支援が必要なケースの認知具合

表1は、「障害のある子ども以外に特別支援が必要なケースはどんな場合か」という設問に自由記述で記入してもらった回答の結果である。回答数は68であり、自由回答の記述内容を分類している。

ネグレクトなど児童虐待と回答した学生が13件と最も多く、「体が不自由な子ども」「発達のおくれ」などの障害児を連想させる回答が8件、病児が6件と多い。「特別支援教育A」の講義の開始当初に学習内容を伝え、「特別支援教育の対象者は障害者だけではなく、外国籍の子どもや貧困家庭の子ども対象である」など、障害以外の事例を出して説明はしたものの、「特別支援は障害者だけだと思っていた」という回答に示されるように、やはり特別支援教育の対象者は障害児というイメージがあるのかもしれない。

その他の回答としては、「お年寄りの人たちに対して」「妊娠している人」「顔がめっちゃめっちゃ可愛くて誘拐される」「協調性がない人」などがあった。

2) 学生の「見た目」の関心具合

図2は「あなたは見た目を気にしますか。1つを選択してください」という問いに回答してもらった結果である。「とても気にする」が36%(20名)、「まあまあ気にする」が58%(32名)と「とても気にする」「まあまあ気にする」と回答した学生が90%以上であり、青年期の学生が「見た目」を気にしている様子うかがえた。

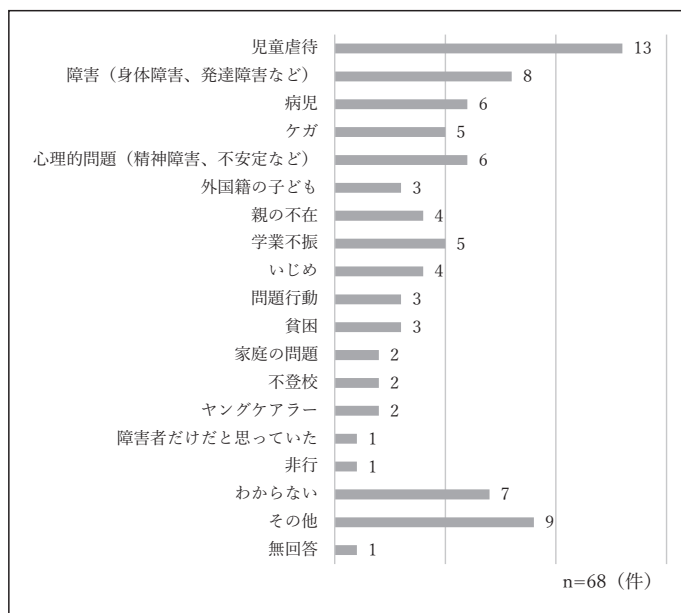


図1 障害以外の特別支援が必要なケースの認知具合（自由回答）

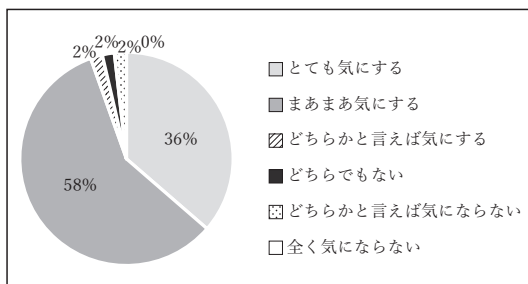


図2 「見た目」の関心具合

3) 「見た目」のコンプレックス

表3は、「あなたは自分の見た目でコンプレックスがありますか」という問いに当てはまるものに複数回答で選んでもらった結果である。「コンプレックスがある」と回答した学生は45名と最も多く、次いで「人の目が気になる」と回答した学生は35名であった。この結果からも多くの学生が「見た目」を気にしている様子がうかがえる。

(2) 「見た目問題」について取り上げたWeb記事を紹介した後の質問

1) 「見た目問題」の認知度

「見た目問題」について取り上げたWeb記事を紹介したあと、「画像のような障害についてご存じでしたか」という問いに、「知っていた」が29% (26名)、「知ってはいたけど、よくわからない」が45% (25名)、「知らなかった」と回答した学生が26% (14名)であった。「知らなかった」という学生が予想よりも少なく、知っていると回答した学生が多かった。後述するが、知っているのはアルビノについてだけ、という学生が多い。

2) 症状をみでの感想

図5は、「あなたの感想に最も近いものを1つ選んでください」という問の結果である。「びっくりした」という回答が34名、62%と最も多く、「自分でなくてよかった」が5名、9%であった。否定的感情も現れていて、無記名回答を選択することが学生の素直な感情表出ができていていると思われる。

図6は「あなたの感想を具体的にお書きください

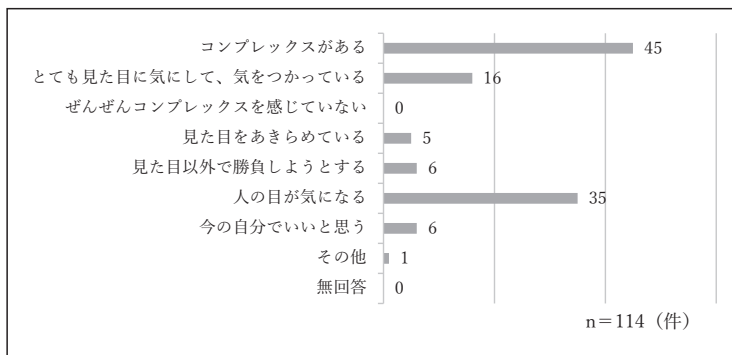


図3 見た目のコンプレックスの有無

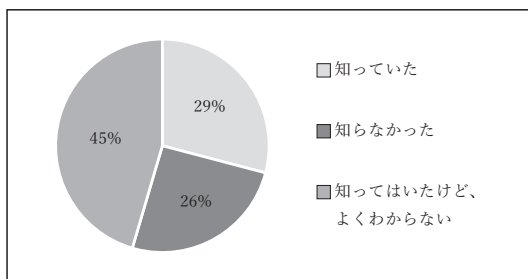


図4 提示画像の症状の認知度

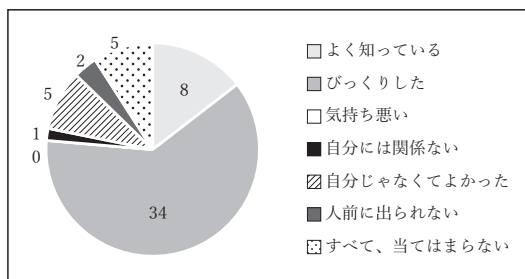


図5 症状を見ての感想

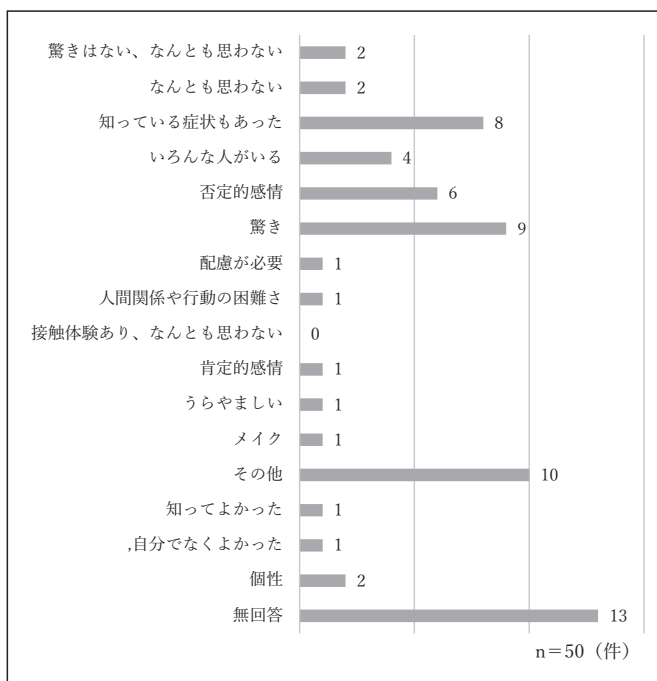


図6 提示画像をみた後の感想の具体的記述内容

い」との間に自由記述で回答してもらった後、それをカテゴリーごとにまとめたものである。「知っている症状もあった」という内容を記述している学生のほとんどが「アルビノ」についての記述であり、「アルビノがうらやましい」や「アルビノが貴重」という回答もあった。授業後の学生との雑談の中で、アニメーションのキャラクターで「アルビノはきれい」というなんとなくのイメージを持っているらしいことが分かった。また、「見た目問題」の当事者が情報発信している SNS などを視聴して、「見た目問題」に関心をもっている学生も複数見受けられた。

3) 「見た目問題」のある子どもへの支援の必要性

図7は、「画像のような症状の子どもたちが、保育施設や学校に入所してきたときに、何らかの支援は必要だと思いますか？（1つを選択）」の結果である。79%の学生が「支援は必要」と回答して

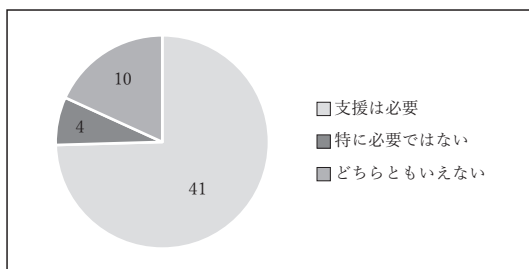


図7 保育・教育施設における支援の必要性

いるが、「特に必要でない」7%と「どちらともいえない」18%の双方を合わせると27%である。

図8は、「なぜ、そのように感じましたか？あなたの考えに最も近いものを1つ選んでください」という問の結果である。

「心身の障害ではないが、保育施設や学校で問題が生じる可能性があるから」と回答した学生が42%と最も多いが、「心身の障害ではなく、保育施設や学校で特にできないことがあるわけではないから」が6%、「心身の障害ではなく、保育施設や学校の「遊び」や「勉強」に影響があるわけではないから」が2%、「心身の障害ではなく個性なので、特に配慮するものではないから」が5%と配慮が必要ないと回答している学生も相当数いた。

図9は、「自分の言葉で書き足してください」として、具体的な感想を自由記述で書いてものをカテゴリーごとに分類したものである。

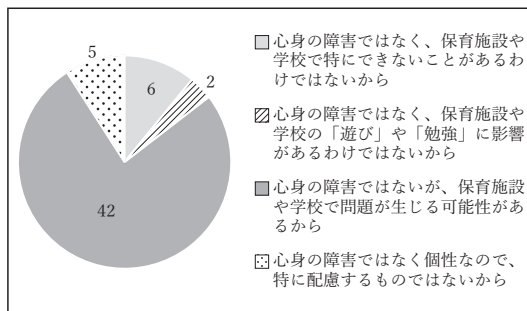


図8 支援についての意見の理由（複数回答）

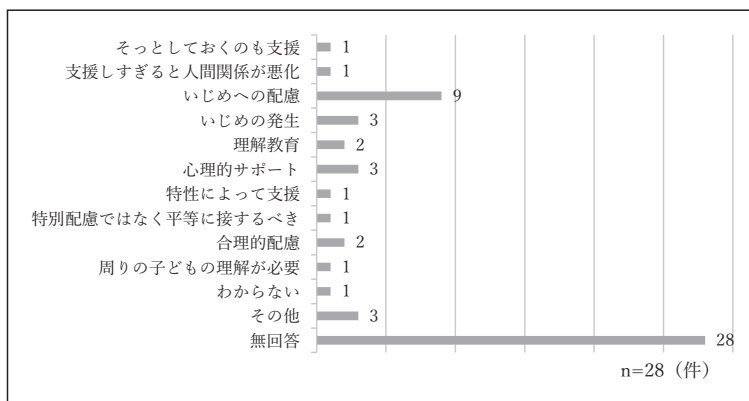


図9 支援についての具体的な理由

「見た目問題」がいじめにつながる可能性について記述したものが3件、さらにいじめが生じるかもしれないという前提で事前に配慮すべきだとの回答が9件と最も多かった。その一方、「平等に接すべき」という支援について消極的な意見もあった。その他の意見としては、「5領域の中に人間関係や表現とあるため、それを育てていく上で配慮した方がいい」というクラスの人間関係を意識した回答もあった。

(3) 意見共有後の感想

1) 他者の意見を聞いての印象

図10は、「皆の意見を聞いてどんな気持ちですか。最も近いものを一つ選んでください」という問の回答をまとめたものである。

また、図11は、「皆の意見を聞いて感じことや考えたことをご記入ください」と自由記述で回答してもらったものを分類した結果である。

難しいテーマではあるので無回答が目立っているが、その一方「他の意見に共感した」3件、「違う意見を聞き、自分の意見を再考」4件など、他者の意見をよく聞いて自分なりに考えている学生の姿も目立った。

その他の意見としては、「他人事に思っている人もいて驚きました」「「色んな人がいるってのを

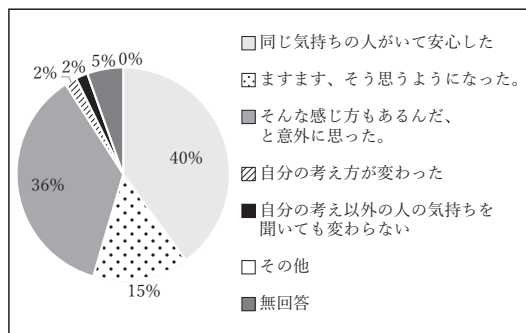


図10 皆の意見を聞いた気持ち

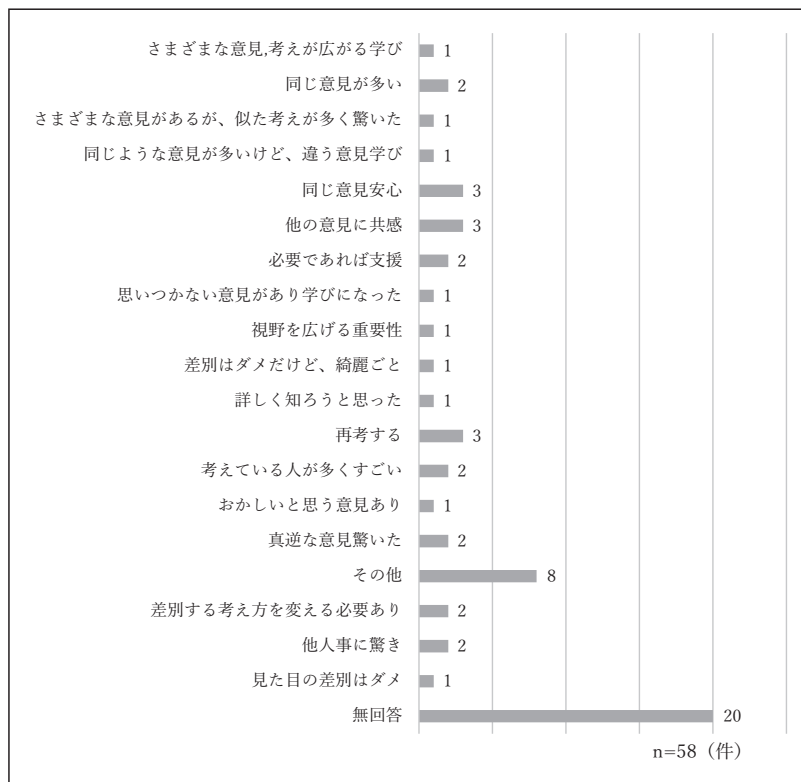


図11 皆の意見を聞いて感じたこと (自由記述)

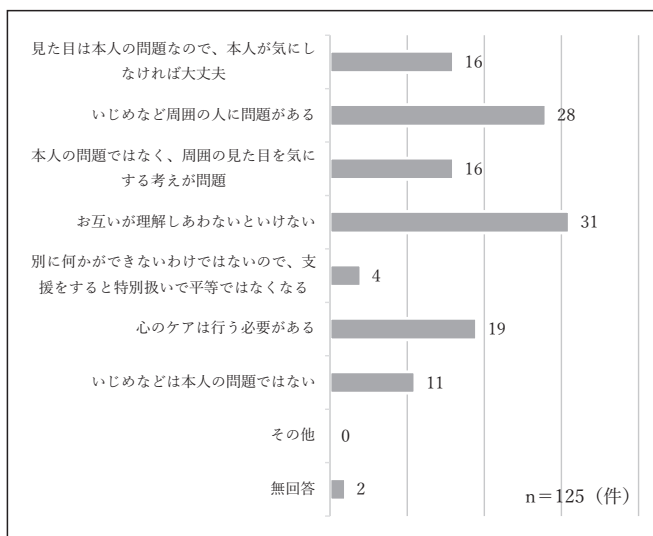


図12 「見た目問題」の支援の方針

分かってみんなの色々な意見も聞いてでも、嫌だとか思う気持ちは変わらなかったのが幼少期からの学びで少しは意志的なものも変わってくるのかなと思いました」「障害だけでなく、まだまだ差別されていることが多いと改めて感じました。人それぞれの思いがあるので無理に考えを変えることは無いと思いますが、自分自身もっと知識を深めていきたいと思いました」という真摯な態度で回答してくれたものが多かった。

最後に「支援について当てはまるものにチェックをしてください（複数回答可）」との間に回答した結果が、図12である。「お互いが理解しあわないといけない」31%、「いじめなど周囲の人に問題がある」28%と、「見た目問題」が本人と周囲の人間関係で生じることに注目している学生がほとんどであるが、「見た目は本人の問題なので、本人が気にしなければ大丈夫」と16%の学生が回答している。

5. 考察および今後の課題

「見た目問題」は扱いづらいテーマであるため、学生が関心を持ちづらいかと心配したが、真摯な意見を書き込んでいる学生が多く、また、興味深く他者の意見に耳を傾けてくれた。授業後に、数

名の学生が今回紹介した Web 記事とは別の記事を読んだことがある、また当事者団体等のネット配信動画で見たことがある、と話しかけてくれた学生もいる。当事者が自分の「見た目問題」を開示する書籍、動画、新聞記事、Web 記事は当事者たちが目標としていることの1つである「知る」ことに一定の効果があることが分かった。

また、学生たち自身が「見た目」を意識、コンプレックスを抱えていることが分かった。思春期やせ症の問題もあるので、ルッキズムの弊害を考慮した何らかの学びの機会があってもよいのではないかと考える。

「見た目問題」に対する何らかの支援が必要と回答する学生が多い一方、心身に障害があるわけではないので必要がない、という回答もある。ICF の理念が浸透していない表れであると考えられるので、今後の授業で障害を個人レベルで考えるのではなく、人と社会との関係でとらえる ICF の観点から、個人の社会的な生きづらさに着目していく必要がある。第14回目授業で「心のバリアフリー」をテーマに障害理解教育について話をし、障害の有無にかかわらず支援の必要な子どもとクラスの子どもの関係、それを支える保育者の役割について話をしたが、まだまだ十分

な理解が図れたとは言えない。今回の調査も統計、考察が不十分であるので、再検討したうえで、今後はもう少し、時間をかけてこの問題に取り組んでいきたい。

様性3 夜間中学意欲の受け皿に」,「多様性4「祈り部屋」大学に広がる」,「多様性5 性をタブー視せず議論共生社会へ互いに刺激」、読売新聞2022年7月5日～13日

〈引用文献〉

- 1 教職課程コアカリキュラム
(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf, 2022年7月25日閲覧)
- 2 徳田克己・水野智美, 2005, 障害理解教育—心のバリアフリー—, 誠信書房
- 3 松本学, 1999, 容貌の自己受容—口唇・口蓋裂の場合—, 現代文明学研究, 2, 88-106.
- 4 西倉実季, 2008, 異形の人々の対処攻略—顔にあざのある女性のライフストーリーから—, 年報社会学論集, 21, 37-48.
- 5 石井政之・藤井輝明・松本学(編), 2001, 見つめられる顔—ユニークフェイスの体験—, 高文研
- 6 深谷節子・岩瀬優美, 2018, 可視的変形者に対する一般人の評価と認識—写真刺激を用いて—, ストレス科学研究, 33, 21-31.
- 7 見た目問題とは, NPO 法人マイフェイス・マイスタイル (MFMS) <http://mfms.jp/mitame-mondai>, 2022年7月25日閲覧)
- 8 「『見た目が全て』じゃない」、毎日新聞2012年7月20日
- 9 医療ルネサンス「症状の違う『仲間』が連携」、読売新聞2011年7月20日
- 10 「『見た目問題』知って」、朝日新聞2012年2月16日
- 11 「『見た目問題』」は『見る目問題』。許容性のある社会が、みんなをもっと生きやすくする」、日本財団ジャーナル2019年9月24日 (<https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2019/36659>, 2022年7月25日閲覧)
- 12 岩井建樹, 2022, この顔と生きるということ, 朝日新聞出版
- 13 教育ルネサンス「多様性1 障害のある生徒も同級生」, 「多様性2 性別で分けない扱い」, 「多

